

こども未来会議(第 15 回)議事録
9 月 11 日(木)13 時 30 分から 14 時 30 分まで

【山本部長】

只今より、こども未来会議の第 15 回会議を開会させていただきます。本日はご多用の中、ご参加いただきまして誠にありがとうございます。会議の事務局を担当しております東京都こども政策連携室企画調整部長の山本と申します。

本日の出席者につきましてご報告をさせていただきます。古坂委員より欠席のご連絡を頂戴しております。また、今回から一般財団法人ピースコミュニケーション財団代表理事ならびに早稲田大学グローバル科学知融合研究所副所長で研究員客員教授の一木広治様に新たに委員に就任をいただきました。

一木様、一言ご挨拶をお願いいたします。

【一木委員】

前回プレゼンテーションさせていただきました、世界のアルファ世代の(国連を支える)世界こども未来会議をやっております一木と申します。

皆さんのところにはですね、8月6、7日大阪・関西万博でご説明したFuture Summit、みらい総会というのをやってまいりました。今日欠席の古坂大魔王も一緒にやってるんですけども、こういう形にメッセージを頂きまして、世界のアルファ世代が戦後80年、広島の平和式典の8月6日を中心にしまして、ピースコミュニケーション宣言っていうのをですね、国連のグテーレス事務総長の代理人でございますが、ユニセフの代表に渡しました。これがですね、2028年に次世代に向けた提言というのを国連が出すんですけども、ここにですね、つながるように引き続き活動して参りますので、ぜひ皆様にもご協力いただければと思います。よろしくお願いします。

【山本部長】

それでは開会にあたりまして、小池知事よりご挨拶をお願いいたします。

【小池都知事】

はい、皆様こんにちは。本日、こども未来会議へのご参加、誠にありがとうございます。前回プレゼンターを務めていただいた、今ご紹介、改めてご挨拶いただきました一木さん、委員に加わっていただくこととなりました。感謝を申し上げます。

今日のテーマでございますが、多様な子供の居場所の創出でございます。子供たちが安心して過ごし、また成長段階に応じて幸福度や自己肯定感を育むことができるようなそんな居場所、健やかな成長の礎となりますので、それを整えるということは、私たち大人の責務だと考えております。

都はプレーパークを始めとしまして、学校始業前の朝の居場所、また都独自の認証制度の学童クラブなど、子供たちの居場所づくりを推進をいたしております。一方で、小学校よりちょっと上のユース世代の子供たちが思い思いに過ごせる居場所の確保も重要でございます。

今日はですね、海外でのユースセンターでの経験もお持ちで、そして現在、文京区で中高生の秘密基地 b-lab を運営されておられる山本晃史委員からお話をいただきたいと存じます。委員の皆様、どうぞ今後の政策展開に向けまして、ご意見、そしてご提案をいただきたいと思いますので、今日もどうぞよろしくお願いいたします。

【山本部長】

それでは、ここからの進行につきましては、秋田座長をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【秋田座長】

テーマは、今知事からもご紹介がございました、多様な子供の居場所の創出でございます。まずは事務局からご報告をお願いいたします。

【山本部長】

はい。それでは事務局から報告をさせていただきます。本日のテーマでございます多様な子供の居場所創出に関連しまして、東京都が都内約 1 万世帯の子供とその保護者を対象に毎年行っております東京こどもアンケートの結果からまずご説明をいたします。

「今の自分は幸せだ」と肯定的に評価している東京の子供の割合は 64.4 パーセントでございますが、年齢ごとに見ますと、高校生は 54.5 パーセントと学年が上がるにつれて低下する傾向がございます。次に悩んでいることがある割合ですが、小学三年生では 52.8 パーセントであるのに対して、17 歳になりますと 91.6 パーセントと、学年が上がるにつれてその割合が高くなってございます。

また、自宅以外に居場所があると答えた子供は、幸福度や自己肯定感などが高い傾向にあるということが分かってございます。都では、子供の多様なニーズを踏まえて、区市町村等と連携し、遊び場や学童クラブ、朝の子供の居場所など、様々な形で子供の居場所の創出に取り組んでおります。

子供の声を反映した遊び場づくりに区市町村と連携した事例もございます。プレーパークやインクルーシブな遊び場などの整備に取り組んでございます。例えば、世田谷区では、子供のやってみたいが実現できるフリースペースを広く確保し、自然の中で子供たちが主体的かつ創造的に遊べる場を整備をしております。

また、東久留米市ではワークショップを開催し、参加した子供たちの声をもとにボール遊びのできる公園を整備しております。

「あなたにとってのほっとできる居場所はどこですか？」という問いに対しましては、児童館や公園などの地域の施設を答えた割合は、小学生と比べて中高生は半分以下となっております。

「児童館は遊ぶものが幼児向けが多く、中学生になったらつまらなくなった」ですとか、中高生だけの場がないといった声もございまして、中高生の地域の居場所の整備が課題となっております。

海外ではユース向けの居場所作りに力を入れている都市も存在しております。

例えば、ベルリンでは多くのユースセンターが設置されておりまして、ユース世代の子供たちは、自分たちの意見や関心が反映された居場所で、芸術やスポーツを自由に楽しみ、放課後を過ごしています。

都内にも中高生向けの居場所を提供している施設がございます。例えば、杉並区の「ゆう杉並」や、調布市の「CAPS」、こちらはいずれも中高生に特化した施設でして、その運営にも中高生で構成する委員会が参画するなど、中高生の声が反映されてございます。

事務局からの報告は以上でございます。ありがとうございました。

【秋田座長】

それではプレゼンテーションによる発表に移りたいと思います。山本委員からプレゼンテーションをいただいた後に、意見交換をさせていただきたいと思います。山本委員、プレゼンテーションお願いいたします。

【山本委員】

はい、改めてよろしくお願いいたします。中高生の居場所ということでテーマいただいているので、私が日々現場で感じていることについてお話させていただけたらと思っております。

先ほどご紹介していただきましたとおり、文京区青少年プラザ b-lab というユースセンターの館長を現在しております。もともとは学生時代に中高生の余暇とか放課後活動を支援することから始まって、フィンランドヘルシンキのユースセンターでインターンをさせてもらう経験もしながら、昨年からは b-lab 館長を務めさせていただいております。

今回、中高生の居場所のリアルな話をさせていただく前に、我々現場として感じている中高生と居場所というのにも少し触れさせていただきたいと思っております。これは、我々 b-lab 職員の中で、日々現場で中高生

と関わる中で、中高生ってどんな存在なのかなということと、そこに対して我々はどんなことをすべきなのかなということをも b-lab オリジナルとして考えていることになっているので、この定義を通して、雰囲気をお伝えできたらと思っています。

まず、中高生、ユースというのはどういう存在かということなんですが、我々日々触れる中で、この二つの側面を持っているのが特徴かなと感じています。一つ目が、揺らぎやすい存在であると同時に、どんな自分にもなれる存在であるというのが大切なことかなと思っています。

中高生世代というのは、やっぱり大人に比べてより揺らぎやすい年代だったり、環境にいて、周りの評価だったりとか、あるいは人間関係で、すごく悩んだりすることが多かったり。揺らぎの中で生きているなということを感じています。b-lab の中でも、友達たちとすごく楽しそうに過ごしている中で、ふとですね、我々職員と一対一で「ちょっと最近こんなつらいことがあってさ」みたいなことを話してくれたりする中で、誰と一緒に過ごすのか、その日の中でもいろんな顔を持っているのが中高生で、パッと見ではなかなか捉えきれない、分かりきらない、いろんなことを抱えながら生きているんだなということを感じています。

同時に、やはりどんな出会いによって、あるいは、知ったことによって、どんな自分にもなれる可能性を秘めた存在であると感じています。我々ですね、この中高生と関わる我々のことをユースワーカーというふうに呼んでいるんですが、友達ではない横の関係でも、学校の先生の縦の関係でもない、斜めの関係で中高生を支えていく我々大人は、中高生の揺らぎに寄り添い、可能性を信じて、中高生の場を中高生と一緒に作っていくことを大切にしたいなというふうに取り組んでいます。

もう一方で、居場所というものを捉えたいと思っておりまして、二つの側面があるのが居場所かなと思っています。一つは、ありのままの自分を丸ごと受け入れてくれる安心安全な空間であるということと同時に、大人になるための準備をする場所でもあるかなと思っています。

一緒に社会を作っていく市民に育っていく。安心安全な居場所とともに、大人になるための準備をしていく。これらを実現する空間や人間関係が居場所でありたいなというふうに感じています。この居場所作りにおいて大事なポイントがあって、我々大人が勝手に居場所を作って、「ここが居場所だよ、どうぞ」というところだと、中高生が居心地のいい場所として感じてくれるか。なかなかそうはいかないと思っているので、中高生自身が、この場所と一緒に作っている感覚を持てると、より場所が居場所になっていくんじゃないかなというふうにも感じております。

文京区青少年プラザ b-lab がどんな場所なのかをお伝えしたいなと思ったときに、今年で 11 年目の運営を迎えるんですが、改めて b-lab ってどんな場所なんだろうかということをも中高生と一緒に考えてみて、こういうビジュアル化をしてみていますので、ちょっと雰囲気をお伝えできたらと思うので、そのまま読ませさせていただきます。

いつ来ても、いつ帰ってもいい。一人でいても、誰かといてもいい。何をしても、何もしなくてもいい。

ここはみんなでつくる“中高生の秘密基地”

「好き」に気づいたり、分かち合ったり、「やってみたい」を、やってみるところ。

誰かを誘ったり、時には誘われたり、思わぬ出会いから、新たな物語が生まれるところ。

さあ、今日のあなたに、どんな物語が始まるかな？

ものがたりどこからともなくはじまる場

です。b-lab というのは、家でも学校でもないユースセンターということで、文京区に住んでいるか、働いているか、学校に通っている中高生世代が、朝の9時から夜の9時まで全て無料で利用できるというのが特徴となっています。

キーワードとしては、下に書かせていただいている三点が重要なところかと思っています。一つ目は、誰もがいつでも利用できる場所であるということです。中高生の利用してくれている子の声を聞いてみると、b-lab 以外の放課後に行く場所となると、学校以外だと、やはりカラオケだったり、ファミレスだったりするところで、どうしてもお金がかかってしまうので、毎日利用することはできない。

そうすると、なかなか友達に学校外で会うという時間が減ったりするということを言っている中で、こういう b-lab のような無料でいつでも利用できる場所があるというのがすごくありがたいということの中高生が言ってくれていますし、実際ですね、コロナが落ち着いてきてから、今、毎年最多来館者数を更新してまして、今年も去年よりも多い傾向で来てくれているので、より中高生にいつでも誰でも無料で利用できる場所のニーズがすごく高まってきているんだなというふうに感じています。

そういう意味では、子供たちが安心して過ごせる権利としての居場所というのは大事なポイントかなと感じています。あとは、「やってみたい」を形にできる場所であるということも、b-lab が大事にしていることです。年間ですね、昨年は 100 個、中高生が自分でやってみたいことを企画ということで提案して、実行してみるという自主企画が行われていたりしました。中高生自主企画だったり、プロジェクト活動であったりとか、あるいは年三回フェスというですね、ミニ文化祭みたいなものを開催しているので、そこで普段やっているバンドだったりとか、b-lab で出会った子と新しいバンドチームを作ったりとか、ダンス、ファッションショーをやってみたりということで、b-lab は好きということを大事に、それを思いっきり発揮できる場所、やってみたかったことにチャレンジできる場所としても機能しているかなと思っています。

最後に、中高生が、中高生と作り続ける場所であるということのも大事かなと思っています。b-lab という場所が高中生にとって居場所と感じてもらえるように、中高生の声をいろいろ聞きながら、場所の雰囲気とかいろんなことを変えて、中高生がより運営に参加してくれるということを大事にしています。

特に、いろんな声を聞きながらやっていく部分と、今は、ユース館長という、我々、私、館長と一緒に b-lab の運営を考えてくれる中高生も b-lab の中にいてくれるので、その子たちと一緒にどんな場所になったらいいのかなということを考えながらやっている。民主主義を体験したり、実践できる場所でもあるかなと感じています。

実際に、中高生にとって b-lab ってどんな場所なのかなということを、少し声をご紹介させていただきたいと思っています。3名の中高生の声をご紹介したいと思います。ある子は、「ガンダムのプラモデルを作ったり、作ったコマ撮りの動画を自分たちで作ったり、自分が興味ある戦争というテーマでオリジナルの映画や演劇を作ったり発表したりして、自分にとって b-lab は主体的に活動できる場所です」ということを言ってくれています。やっぱり好きなことをキーワードに、やってみたかったことを思いっきりチャレンジしてみる場所であるかなと思っています。

ある子はですね、「学校では、他の学年の人と関わることが少なく、限られた人間と関わっていますが、b-lab では趣味が同じだったりとか、たまたま一緒に遊ぶことで仲良くなったりする。学校や学年を気にせずたくさんの人と関わることができ、自然体の自分を出せるようになったと感じています」ということも言ってくれています。やはり b-lab は学校学年関係なく、共通の好きなことだったりとか、たまたま一緒に遊んだってことで、新しい友達がどんどん作れる場所でもあるかなというふうに思っているの、いろんな自分を出せる場所でもあるかなと感じています。

最後は、「中学校ではあまり友達が少なかったのですが、b-lab に通い始めてたくさん友達ができました。私にとって b-lab は第二の居場所です」ということを言ってくれていました。この子もですね、b-lab の中で自主企画というものをいろいろたくさんチャレンジしてくれている子なのですが、一方で、感覚過敏のことも持っていて。b-lab で楽しく過ごしてくれているんですが、どうしてもたくさん人が来ると、ちょっと居心地が悪くなっちゃったりとか、辛くなっちゃったりすることがあるんですが、この子と一緒に、信頼関係も作れているので、そういう悩みをですね、彼女から打ち明けてくれて。じゃあどうしたらいいかなということで、彼女の場合は、まずは自分の感覚過敏というものがどういうことか、周りの中高生に知ってもらうことから始めたいということで、自主企画として何か同じ悩みを抱えている b-lab の仲間を見つけてきてですね、ちょっと感覚過敏ってどんなことなのかな？ということを伝えてくれるようなイベントを開催してくれたりとか。そこから今は、じゃあいろんな子が b-lab 利用するので、様々なことを思った子が、どうやったらみんなで居心地が良くなるのか、どうしたらいいのかということを今一緒に考えてくれるようになってくれています。そういう形で、やっぱり多様な子たちが利用してくれているのが、この b-lab という中高生の居場所かなと感じています。

現場を踏まえた提言ということで、いくつかご紹介できたらと思っていますが、すべての若者が尊重され、選択できる居場所ということで、何か一つのパーフェクトな居場所が生まれるのかというと、やっぱりそうではな

くて、その子たちに合った、自分が居心地がいいと思えるような人がいたりだとか、環境というものが、多様に存在しているということが一つ大事なかなと思っているので、子供たちが自ら選べるということは、一つ大事なポイントかなと感じています。

そして、全ての若者が様々な意思決定に参加する機会をということで、その居場所、場所が居場所になっていくということも含めて、中高生、ユースと一緒に作っていくということを大事にしていきたいなとも感じています。

そして、ユースワーカーの配置とユースワーカーマインドを持った大人の育成ということで。適切にこの中高生と大人をつなぐユースワーカーという人たちがいるということと、ただ、その人たちだけじゃなくて、いろんなまちにいる大人たちがユースワーカーマインドという、若者と信頼関係をちゃんと作れたりとか、対等な関係で関わったり、あるいは若者の声をちゃんと聞けるというような大人がまちに溢れていくことが、結果的に中高生をまち全体で支えていけるということにつながるかなとも感じていますので、こういうあたりが大事なかなと感じております。

最後に、改めて b-lab はということで、b-lab は若者との信頼関係をベースに、他者と共に生きていくこと、b-lab の中では、多様な子どもたちがいる中で、どうやったらいろんな子がいる中で、お互いに折り合いをつけながら、居心地のいい場所をそれぞれが感じられるようにできるかということは、これから社会に出た時に、いろんな背景を持った大人がいる中で、どうやったら一緒に生きていけるのかなってことを考える、大事なポイントになるかなというふうに感じています。

そして、他者と共に、自分が所属しているコミュニティであったり、社会ってものを作っていくということ。この二つがですね、自然に育まれる場所で、ありたいなというふうにすごく感じております。

若者の信頼関係というところでは、先ほどご紹介したユース館長というものも、中高生の声を聞いてみようということで始めてみたのですが、いきなり声を聞いても、なかなか、普段やっぱり聞かれた経験がないので、何を言っているかわからないみたいところで漠然としていたので、いろんな声をとにかく聞いて実現することを繰り返していく中で、今は、b-lab に集まってくれる中高生のいろんな意見を、ユース館長が中心となって、どう運営に反映させていくのかということを考えてくれるようになってくれています。ユース館長自体も、何が楽しいのかなと聞いた時に、やっぱり改めて大人がちゃんと声を聞いて動いてくれることが分かることが、何かやりがいにつながってくれることを教えてくれているので、大人をちゃんと信頼してくれていることが、関係性を築けている、居場所にとってやはり大事なことだし、これからの社会にとっても大事なポイントかなというふうにも感じております。

一旦、以上で私のプレゼンテーションとさせていただきます。ありがとうございました。

【秋田座長】

山本委員ありがとうございます。大変素敵なお発表ありがとうございました。それでは、これから意見交換に入りたいと思います。本日のテーマでございます、多様な子供の居場所の創出について、プレゼンテーションも踏まえ、それぞれのお立場からお話をいただければと存じます。

まずは各委員からですね、順にお一人4分を目途にご発言をお願いいたします。それでは、大谷委員から席順でお願いするということでございます。よろしくお願いいたします。

【大谷委員】

ありがとうございます。本日は都の取組のご紹介と、あと、山本さんのご報告ありがとうございました。b-lab は、前からウェブサイトとか拝見していて関心があったので、今日直接お話を伺えて本当に興味深く伺わせていただきました。私から短く、時間内で三点お話しをしたいと思います。一点目は、子供とか若者とかユースとか中高生、今日ご発表は中高生ということですが、私は国連の子どもの権利委員会の委員をしていました関係で、常に子供っていうと18歳未満で考えるんですが、ただ、その子供も0歳から18歳という非常に多様で、成長し、能力が開花していく、発達していく時期なので、子どもの権利委員会では乳幼児期の重要性とともに、実は思春期の子供に注意を当てて、この時期というのは非常に体も発達し、精神的にも発達し、他方でちょっと不安定だったり、問題を犯しがち、起こしがちな世代と見られたり、でも大人へのステ

ップで非常に大事な時期だという認識を持っていました。ということは一緒に申し上げたかったのですが、その中で一つ、国連では一応若者ユースというときには、今度は 15 歳から 24 歳というふうに捉えているんですね。

15 歳から 18 歳が高校生のときから重なるんですけども、そういう意味であとで三点目に年代ということと考えたときに、中高生の居場所にすごく着目して大事にすることとともに、実はユースということで、18 歳より上の若者がそこにどう絡んでくるかということについて、後でちょっと私なりの提言、提案を申し上げたいと思います。

二番目に、中高生あるいは思春期の子供たちに焦点を当てて居場所ということと考えたときに、今度また国連の子どもの権利委員会でこういう話をするときに、子供の生活空間ということを考えますと、家庭、学校、地域、そしてオンラインということをよく言うんですね。

それは物理的な居場所という意味での居場所とともに、生活空間という意味、あるいは人間関係をどこで子供たちが築いているかということと考えますと、今どうしてもオンラインというのが切り離せない。今日のテーマが多様な居場所の創出ということですので、これは地域行政が、例えば都が創出するという意味で申し上げるわけではないんですけども、やはり子供たち、特に中高生、若者にとってのその物理的な居場所ということだけではなくて、人間関係とか、どこかの集団に属している、帰属している意識、ここに行けば誰か仲間がいるとか、安心して人と話せるとか、そういうことを考えたときのオンラインの重要性ということも念頭に入れていく必要があるのかなというふうに思いました。

また、子供、特に低年齢の子供の場合は、安心して、それこそ安全な空間ということが非常に誰かに見守られてということが重要だと思うんですけども、今度中高生、ちょっと年齢が上がっていきますと、山本さんのお話にも出てきましたように、コミュニティーの一員としてその場を自分たちがつくっていく。その市民の一個になる、その重要なステップという、その子供自身が参加参画する。そこでの政策決まりごととかに関わっていくということの重要性は今日も強調されていたと思うんですけど、全く同感です。

最後に三点目なんですけれども、一つの提案といいますか、中高生の上ですね、例えば大学生とか、あるいは年齢的にその 18 歳以上の人たちが b-lab ではユースワーカーということで関わっていらっしゃるということだったんですが、最後におっしゃったように、それ以外の方たちがどう関わっていくかという意味では、こういう活動に参加されたり、あるいは b-lab で過ごされた方たちが 18 歳以上になった時に、何らかの形でまたそこに関わっていくとか、あるいは大学生でも子供たちを支援するような取り組みをしたいといった人たちが一緒にどうやっていくか。

こういうことを考えますと、どうしても都が具体的に何をすることだけではなくて、民間でそういう年齢的な垣根も越えて、あるいはさっき申し上げたオンラインのことも含めて取り組みをされている民間の取組を、都がどう支援していったり、連携していくかみたいな観点が重要と思って伺ってありました。以上です。ありがとうございました。

【秋田座長】

大谷委員ありがとうございます。それでは続きまして、池本委員お願いいたします。

【池本委員】

はい、ありがとうございました。私も近くに世田谷の中高生施設があつて、そこは何度か見学に行つて、素晴らしい施設だなと思って、今日もこういうものが出来つつあること、素晴らしいなと思っていました。

ただ、問題は本当に数が少ないことで、私も世田谷にあつても、自宅からそこに行くまで、バスに乗ったり、自転車だと何十分とかかかってしまうので、やはり億劫になってなかなか行けないというのがあります。

本当にこういうものは自治体間の格差もありますし、ごく普通にどこに住んでいても、そういうものが保障されるようなところまで持っていく必要があるなというふうに今日はお話を伺って思いました。あとは、移動の支援というところで、バス代がかかるとか、これだけ暑いと本当に自転車で行くのもちょっと危険というような形になってしまうので、移動の交通費の問題だとか、あるいはもうちょっと数を増やす、その辺のことも配慮が必要になってくるかなと思いました。

その点で考えると、学校は身近にあって、その場所がもっと活用できないかということを思いまして。最近高校でも校内カフェみたいなものを設けたりと、いろいろ工夫されているところもありますけれども、この間、小学校では都内の小学校で学校内にプレーパークを作ったというので、私もちょっと今度お伺いしたいなと思っているところですが、そういうふうに学校をどんどん活用して、身近に公平にそういう場所ができるといいなというふうに思いました。

あと、もう一つ、今日はテーマが多様な居場所ということなんですけれども、本当に場所も多様な場所が必要というのは、子供の趣味というか、特性とかが相当多様で、男子と女子でも違うし、そこをバリエーションを持たせるということも非常に重要で、特に女子だと大体何かするっていうよりは、カフェとかカラオケ行ってみると一緒にいるとか、喋るっていうことがメインになってくるので、そうするとお金がかかってしまうということになるので、そういう居場所みたいなのところも増やしていく必要があるかなということを思ったり。

あと、中高生でいうとバイトも一つの居場所には相当なっていて、そのバイトの安全性とか居場所感がどうなのかっていうことも、良い居場所になるような何か対策のようなものも必要かなと思っています。多様性といったときには、例えば自然が好きな子とか、体を動かすことが好きだとか、ドイツで昔調べたときに、動物と触れ合うことが好きな子に日常的に動物の世話ができる公園を地域で民間で作っているなんて取組もありましたし、スポーツも日本だとガッツリやらないとハイレベルの人しかなかなかやる場所がなくて、ちょっと気軽にできるドイツだと公園に卓球台が置いてあって、ラケットだけ持っていけば気軽にできるような空間があったりしましたけれども、そういう多様な空間とか、多様な子供に対応したことができるといいなと思います。

多様にした上でなんですが、一つ、日本の課題として、どこにどういう居場所があるかの情報が中高生に届いていないと思うのです。うちの子は、私がそれを知っていたので、お友達を連れて中高生の居場所に行くんですけど、ほとんどの子は知らなくて。

特にバンドのようなスタジオを借りたらものすごいお金かかるのに、タダで使えるなんていうことは知っている子しか使っていないというような状況もありますので、そういう情報をいかに浸透させて、そして情報を伝えた上で、中高生にこういった居場所がまた欲しいということを挙げてもらうようなことも循環させていけたらいいなと思いました。はい、私から以上です。

【秋田座長】

池本委員ありがとうございます。それでは続きまして、松田委員お願いいたします。

【松田委員】

山本さんありがとうございました。「b-lab は秘密基地」っていう言葉があって、僕も昔から秘密基地、やっぱりすごい大好きです。何で秘密基地が好きなのかなと思っていたのですが、山本さんの言葉にもありましたけど、やってみたいを形にできるっていうのは、そうだなと思って。自分の好きに挑んでいるという、そんな場所なんだなってすごい思いました。

そういう意味では、確かに今の子供たちとか若い人って、そんなに自由にそういうものに取り組めるっていう場ってないよなっていうのがあって、すごく響いたところでした。合わせて、秘密基地系でいくと、「ゆらぎ」という言葉もすごくやっぱりウツとくるところがあって、あの確かにあの揺らぐってなんかネガティブなイメージもあるんだけど、実はあの自由とか創造とかっていう意味ではゆらぎ、すごく大事だと思っていて、その意味では遊びも本当にゆらぎが中心だと思ったんですね。

その意味では安心していることと、一方では好きに縛られないでいられるんだっていう両面性があるって、そういう中で心が揺らいで自由というようなことで、今日のお話が本当にストンと落ちてきて、居場所ってそういうところでないといけないとすごく感じていました。

その意味では、あの東京学芸大学の中にですね、孫泰蔵さんという人から寄付いただいて、秋吉(浩気)さんという建築家が作った HIVE っていう、訳の本当にわからない建物があるんですが、壁もなくて、全然空洞なんですけど、すごい大きな建物で、大学の先生からはもう本当に評判悪いんです。これ何に使うの？ってもう本当に。でも地域の子供たちからはすごく支持を受けていて、この前もたまたま大学の中を歩いていたら、二人ぐらいの小学生、それもあの3年生ぐらいの女の子だったんですけど、リュックをしょってきて、二人

で敷物敷いて、そこで家から持ってきたお茶とかお菓子で二人が喋っているんですね。

それで勉強しだしたんでびっくりしたんですけど。勉強するんだと思ったんですけど。そんなやっぱり揺らぐとか、自分の好きなことができるとか、あるいはその逆に、ある種大学っていうような安心できるみたいなこともやっぱり加わって、そんな場所になってるんだなって、今日話を聞いていて改めて思いました。

だからその意味では、何かアウトリーチじゃないですけど、さっきも池本さんもおっしゃいましたけど、学校とかあの公的なものが持っている安心な空間っていうものが、そういう若者にとって、一方では自由にできるっていうことで広がっていけば、居場所ってそんなに「さあ、作るぞ」って構えなくても、いろんなところにあるのかなって思いました。

今、万博もやっていますけど、2027年にセルビアで万博が今度あって、テーマが「Play for Humanity」っていう、遊びは人類を救うみたいな、そんなことらしいんですけど、そんなところにも接続していったら本当面白いなと思って聞いていました。以上です。

【秋田座長】

松田委員、どうもありがとうございます。それでは続きまして、田中委員お願いいたします。

【田中委員】

はい。すぐ聞いて、すぐ内容をまとめるのが下手ではあるのですが、感じたことをお話できたらと思っています。まず、感想ですが、松田委員と同じくユースはゆらぎやすい存在という、「ゆらぎ」という言葉、大変共感しました。

私は7歳から18歳まで児童養護施設で暮らしていたのですが、b-lab の子供たちの感想を聞いて、児童養護施設みたいだなと思いました。施設にいと、本当に人種も違ったり、障害があるかないとか、ちょっとカッとしちゃってる子とか、そういう子と一緒に共同生活をしたり、年に数回行事を通してその子のいいところが見つかったり、ダメなことも知ってるけど、「それがその子だよな」みたいなマインドが施設にしながら醸成されて。社会に出た時に、私はいろんな人に対する見た目の偏見とかを持ちにくくなりましたし、対等に知りたいなとか、自分も開示してもいいかなみたいな、そういう人に育ったと思っているので、そういう知らない人同士がいる中で、いろんな人と知り合っていく空間っていうので、施設と似たような感覚を持ちまして、非常にいいなと思いました。

私自身はラジオのパーソナリティのお仕事もあるんですが、そのゲストに、フリースクールに通っていて校内居場所カフェを利用した10代大学生のお子さん、お子さんではないですね、も来るんですけども。その子たちのお話を聞く中で、「何がその場所にいて良かったと思える」？って質問を毎回毎回しつこくするんですけども、その時に言ってくれた言葉の中で、「そこにいるスタッフさんが自分のことを開示してくれたから、自分もこれまでの生きづらかったことを話そうと思えたんです」って言うてくれて。「学校ではそれできないの？」って聞いたら、「やっぱり学校の先生は自分のことを話してくれない」と。自分のことっていうのは、その先生のパーソナリティが見えない。だから、「これを話したらこう思われるんじゃないか」っていう、壁なのを感じる事があってできないって言うて。それがユースワーカーマインドというかわからないですが、そういったマインドのある大人に囲まれているお子さんたちは、いろんな生きづらさを抱えていても、そういった大人に出会えると、すごくこれまでの経験も開示できるし、今の自分も肯定的に受け止められる人に育つのではないかなと感じました。

山本さんへのご質問としましては、実際に、b-lab でユースワーカーさんは何人ぐらいいるのかな？とか、ユースワーカーマインドだとか、ユースワーカーの育成でどんなことをしているかとか。あとはユースワーカーマインドがあると、もしかしたら大人同士の関係性も良くなるんじゃないかなと勝手に思ったんですけども。職員さんの定着とか勤続年数がどれぐらいなのかというのは気になりました。そして、会議の前に少し雑談をさせていただいたんですけども、子供たちのアンケートを実施されたという話を聞きましたので、どんなアンケートをして、どんな結果があったのか、そして今後、東京都として子供たちにアンケートをする際に、こういう視点で調査したらいいのではないかな、みたいなところがあればお聞きしたいなと思っております。

最後に意見になるのですが、今回、多様な居場所の創出ということで、私自身の感覚にはなりますが、カテゴ

ライズされた子供たちの居場所というのは増えてきていると思っています。それは児童養護施設で育った子限定の場所だとか、あとは夜の居場所もちょっとずつ増えていたりします。

そういったカテゴライズされた子供たちの場所は増えていて、私自身もそういった当事者性があるので、こういう活動をしているんですが、私が育った東京都世田谷区の現区長、保坂区長が、「田中さんがそのような思いで活動するのはいいけれども、やっぱりそのカテゴライズされた場所からまた社会の中に入っていく。そういう場所という考え方も必要だから、施設に育ったから施設の子だけじゃなく、広く若者っていう視点で子供たちのことをもっと考えてみたら？」とアドバイスをされたことがありました。ユースセンターっていう、やっぱり広い、カテゴライズもされていない場所と共に、何かそういった子たちも次の場所、社会に移行するって言い方が適切か分かりませんが、また社会に混ざっていく段階で、そういった広く誰もカテゴライズされない場所があるといいなと思いました。

大阪には夜のユースセンターという場所があるようなので、そういうのも東京都としてチャレンジしてもいいのかなと思ったり。ちょうど昨日ですね、足立区の「ふらっと・とーと」という場所ですね。それは多世代の居場所ということで、地域のお母さん方の食料支援だとか、子供さんがいつでも来られる場所を解放されているんですが、その職員さんが意識しているのは、そこに参加する子供たちの社会関係資本を増やすことだと言っていました。社会関係資本は、その人いわく、横のつながりをその場所にいてどれだけ増えたかというところを見ているし、そこをその活動拠点のアウトカムに設定しているということで、そういった指標の測り方だとか、横のつながりが増えるということも重視して、居場所の設置とか検討されるといいのではないかと思います。以上です。

【秋田座長】

田中委員ありがとうございます。田中委員からのご質問は、もう一度、後で山本委員にご発言いただくとき、ぜひ補足をお願いできればと思います。それでは続きまして、一木委員お願いいたします。

【一木委員】

はい、山本さんありがとうございます。僕も何十年もこういった活動をしているのですが、こういった輪が広がっていく、やる人が増えていくことが大事だと思っています。そして、今、世の中が複雑化しているので、サポートセンターみたいなコアなものがあつた方がいいのではないかとすごく感じているんです。

ちょっと世代が上がりますが、僕 10 年、今、大学生を教えていて、今の子どもたちはデジタルネイティブですごく優秀なんです。でも、効率論を唱えたりするので、やはり人との触れ合いみたいな、コロナもあつたんでしょうけど、非常にコミュ力が弱いんですよね。そういった意味では、この居場所づくりでいうと、居場所って推し活と一緒に、やりたいことがある人は集まりますよね。やりたいことがない人たちをどうするかっていうのが、どこ行ったらいいのかな？みたいになってしまうような気がするのです。本当に、推し活と一緒にだと思っていて。

今、高校生のダンス部は、野球部の人口超えたんです。僕、10 年ぐらい高校生ダンス部選手権って二つあるんですけど、ずっと審査員をやっているんですが、これも夏の青春です。そういう子どもたちはもう多分居場所はあるんです、友達が。クラブ活動も減ったり、友達と気が合わないってなった時の子どもたちの居場所がなくなっている。僕らバブル世代ですが、ちゃんとした場所に行くのが、かっこ悪いって思う世代もいたりするんですよね。だから、その受け入れがすごく難しいと思うのです。結局、そうすると、そういう子どもたちをケアしてくれる人ですよ。人のネットワークがどれだけあるかというのと、ケアも大変ですね。ここまでいろんな複雑化しちゃうと、いろんなケアをしなきゃいけないですよ。

何か本当に推し活と一緒に、何かやりたいなっていうのを触れ合えるような場があつたりすると、その中からまたそういう子どもたちが、何て言うんでしょう、そのものを目指していきますし、まだ見つからない子どもたちはまた戻っていつかもうかもしれないですけど。そういうような時代になっているんじゃないかなってすごく思うんですよね。

結局、友達とか人じゃないですか。やはりネットワークというか、そういう温かみがあるものがないと。AI には、厳しくばって言われて、もっと嫌になっちゃったみたいな話を聞くのです。本当に、そういう場が増えていくことと、やっぱり何かそれを相談するケアセンターみたいなのがあつたらいいのではないかと、聞いていて思いました。ありがとうございます。

【秋田座長】

一木委員、どうもありがとうございます。それぞれ皆様、ご意見ありがとうございます。それでは、プレゼンテーションや皆様のご意見を受けまして、小池知事から何かございますでしょうか。

【小池知事】

山本委員のご発表ありがとうございます。現場で何が起こっていて、課題が何なのか、とても分かりやすく受け止めさせていただきました。

また、今日のプレゼンテーションに対しての皆様方のご意見もとても具体的、また課題をですね、挙げていただいて誠にありがとうございます。友達とおしゃべりとか、バンド活動、ダンス、その練習の場、また時には勉強の場など、多くの中高生が家でも学校でもない居場所で思い思いに過ごすという、その意味で大きな役割を果たしておられるのだということ承知をいたしました。

例えば、だったら中高生に、その彼ら自身が運営にもっと関わるとか、そこで自主性が出てきたり、そこから社会性を身につけるとかですね。そういう居場所があることによって、様々な学びができてくるんだろうということを、このように思いました。こうした生きる力を育む居場所の重要性ということだと思います。多感な時期なわけですね。そこをどうやって受け場として設けて、そしてそこがうまく運営、その主体である子供たちも含めてね、できるのか、そのような気づきをいただいたところでございます。特に都としても考えますのは、多感な時期になるわけですね、その時間というのは、そういった中高生の気持ちに寄り添いながら、彼らの成長の後押しにつながる、そんな居場所づくりに力を入れていきたいとこのように感じたところでございます。ありがとうございます。

【秋田座長】

小池知事、どうもありがとうございます。それではですね、プレゼンターの山本委員にも、いろいろご発言を、皆様のご意見を伺って、ご質問もございましたので、何かご発言をいただければと思います。山本委員、お願いいたします。

【山本委員】

はい、ありがとうございます。じゃあ、ご質問いただいた部分についてもちょっと触れていきたいと思っておりますが、アンケートというお話が出てきて、このどう取ってどう測るかというのは、やはり居場所ということでも結構悩みながらやっている部分ではありまして、現状の我々が何をやっているかといいますと、少なくとも年2回ですね、利用者アンケートというものを取っています。b-labに来てくれる子の中で500人、ミニマム500人の声をちゃんと聞こうということでアンケートを取っておりまして、結果自体はちょっとすいません、パツと出てこないんですけど、例えば「b-labという場所を通して、何か好きなことに出会えましたか？」みたいなことだったりとか、「安心してスタッフと喋れますか？」とか「安心安全を感じてくれますか？」みたいなことを聞いたりするようなアンケートを主にとっています。

ただですね、やっぱりこのアンケート項目自体もどういうものかいいかってことはやはり悩んだりしているもので、もしできるのであれば、その部分の中から中高生にとってどんな場所であってほしいのかというところから、中高生と一緒にアンケート項目自体も見直してきて、みんなの音がちゃんと反映できるような内容になっているのかみたいなことは一緒に作るってことは確かにご質問いただいて、何かb-labでも一つチャレンジしてみたいなというふうに思っていたところでございました。

あとはですね、ちょっとこれもそうですね、確かなものではないんですけど、何か海外とかで見てきた中でのアンケート、利用者満足度みたいなのところという、何かいくつか項目を設定しながら、その達成度がどのくらいなのかっていう、ループリック形式で声とか、自己評価をするみたいなのもありまして。例えば子供の参画は5点満点中何点まで自分たちはできているのか、中高生はどのくらい感じているのかとか、多様性への配慮ってどこまでできているのかみたいな、項目ごとに評価をつけているみたいなのところで、どこを大事にしたい自分たちの居場所なのかってことを自分たちで決めつつ、声を聞くみたいなのをやっているというののちょっと聞いたことがあるので、そういうこともb-labとしては参考にしながら、いかにちゃんとよく来てくれる子だけじゃなくて、b-labの場合は毎日来てくれる子もいれば、週1の子もいれば、年に1回とか2年ぶりに来みたいなのもたくさん来てくれている場所なので、そういう子たちの声をちゃんと拾っていくってことを考えてやっています。

あとはユースワーカーとして働いている大人の話とか、あとは大学生世代の支援という話もございまして、そこにちょっと合わせてやっていることをお伝えできたらと思っていますが、b-lab という現場においては、働いている職員はだいたい 15 名ほどいまして、プラスで大学生、若手社会人の子たちが 15 名ほど活動してくれていまして、その子たちは半年に一回の入れ替えで活動してくれています。

我々b-lab の場合は中高生をメインにした場所なので、大学生世代になると利用できない、小学生も利用できないという空間にはなっていますが、その中でもですね、大学生になった中で中高生の放課後のことを支えたいということで手を挙げてくれたりとか、今居場所とかそういうものに興味がある子たちが每期 15 名ほど活動してくれています。

その中で、大学生の子たちの声を聞いていると、よく出てくる声が、半年間活動してみて、中高生の居場所を支援するということをやっていたんですが、気づいたらこの b-lab での活動自体が自分の居場所になっていたということをよく大学生の子も言うてくださっているので、高校生を支えるということをやった結果、そこが自分にとっての居場所になっているというのは起こっている現象かなと感じていますので、その支えるということをしている仲間たちが、結果的に結構大学生の中で就活相談をしていたりとか、我々職員も含めて、そういういろんな大学生の相談に乗ったりとかってということも結構やったりしているので、そうですね、大学生世代の若者の支援でいうと、支援側になることによって、そこで一つコミュニティができていくというのも一つあることかなというふうにも感じておりました。一旦、以上とさせていただきます。

【秋田座長】

はい。山本委員、ありがとうございます。皆様も様々な意見をいただきましてありがとうございます。私の方からも、今日のご発言を伺って、一言申し上げたいと思います。居場所っていうのは子供の笑顔、東京は笑顔を大事にしていますので、子供の笑顔や安心を生み出し、そして子供たちの成長に必要な場でございますけれども、今悲しいことに、一方で自殺率や高くなったり、不登校が増えているといった実際の課題も起こっているところでございます。

また、本当にお稽古ごとで忙しいとか、塾で忙しいというようなことで、中高生がすごく忙しくなって、実際には子供たちが生の声で聞いたんですけども、試験の前になると睡眠時間を削って本当は遊びたいんだけど、そんなこと言てられなくて、勉強しているというような、あの本当にそれが子供のためのウェルビーイングになっているのかなって考えるような事態もございます。

そういったところで、あの子供のウェルビーイングを高めるためには、もちろんですね、自宅、それから学校は極めて重要ですけど、それだけではなくて、第 3 の、そして地域のか所としてですね、複数の居場所があるということが、今日も皆様のご意見を伺っても、大事だと思いますし、それが部活動的な場であったり、サークルのような場になっているということが、ほっとして安心できる居場所として重要なんだと思いますし。それが特に中高生の場合は、市民になっていく、参加していく、その成長の場にもなっているということがとても重要だと思います。

そのためにも、どんな場所が居場所になっていくのかって、今日の創出というお話で、子供たち自身が意見を出して、大人と共につくっていくというユース館長の話もそうですけれども、そうしたことが、重要なのかなと思っています。

都では、これまでも、遊び場とか学童クラブとか、割と児童の部分にはターゲットを当てて、居場所の創出に関しまして、区市町村と一緒に、様々な取り組みを行っていただいておりますけれども、また、本日の議論で、思春期の子供たちが自分らしく過ごせる今一番そこに課題がやっぱり山積している、そのところについての居場所が極めて重要だということも確認できましたので、こうした居場所が子供たちにとっても、手軽に先ほども、池本委員からもありましたけど、すぐどこの場所にもでもあるというような形で身近な場にあるということが大事だと思いますので、ぜひ都が率先してですね、子供たちのために、一人ひとりの笑顔のために過ごせる居場所というのを、その年齢に応じた形で、つくっていただいたり、それから先ほど大谷委員がありましたユースということで、18(歳)だけじゃなくて、もうちょっと上の人たちもそれをまた支えていくような関係が作れる居場所というものが、できていくとよろしいのかなというふうに、伺っていて感じた次第でございます。

私の方からは、以上のような意見をお話しさせていただきましたが、最後に、もう一度知事より、ご発言、閉会のお言葉をいただけたらと思います。

【小池知事】

山本委員、本当にありがとうございました。そして、委員の皆様方、活発なご議論をいただきました。

子どもたちの健やかな育ちを支えるということは、大変重要なテーマでございます。そして、その子どもたちが安心できる居場所の存在が重要であることを改めて認識をいたしたところでございます。子どもたちが置かれている環境というのは、本当に様々でございます。

そういう中で、子どもたちの目線に立って、一人一人の悩みを聞き、そしてそれに応えられているのかどうか。最適なサービスを提供できているのかどうか。そういった視点を常に意識しながら、都として居場所づくりを推進していかなければと、このように思っている次第でございます。

また、これからもですね、区市町村とも連携しながら、子どもたちの多様なニーズを踏まえた居場所づくりを進めて、子どものウェルビーイングを進めていきたいと、高めていきたいと思っております。最近、SNSの時代とか、スマホをもう子どもたちも持っていて、みんなで集まっているのに、みんな一人一人そのスマホとにらめっこしていると、全然コミュニケーションがないとかですね、そういった状況の中で、どうやって子どもたち同士の話し合いができたり、楽しめたり、一緒に活動ができたりという、そういうまさに居場所づくりですね。

これ、とても重要だと思っております。これからも委員の皆様方から忌憚のないご意見を頂戴したいと思っております。そして、先ほど秋田先生からもおっしゃっていただいたように、やっぱり子どもの笑顔が溢れているまちって元気なまちだというふうに思っております。

そういう意味で、笑顔が溢れる、子どもたちの笑顔が溢れる、そんな東京目指してまいりたいと思いますので、引き続きよろしくお願いを申し上げます。今日はありがとうございました。

【秋田座長】

小池知事、どうもありがとうございました。

そして本日は長時間にわたりまして皆様お疲れ様でございました。そして山本委員、素敵なお発表ありがとうございました。そして、委員の皆様もそれぞれのお立場からどうもありがとうございました。